ACS日本支部ニュース

NEWSLETTER FROM THE JAPAN CHAPTER OF AMERICAN COLLEGE OF SURGEONS

2018. Apr. Vol.10

主な内容

My 2017 Japan Visit as the ACS President …… P1
American College of Surgeons（ACS）の日本支部長退任のご挨拶 …… P2
外科学の新知見を求めて …… P3
新American Collage of Surgeons（ACS）のFellowになりまして P4
藤井功一先生を偲んで …… P5

My 2017 Japan Visit as the ACS President

ACS前会長

コートニー・M・タウンゼント.Jr.

Courtney M.Townsend,Jr.,MD,FACS, former President of the American College of Surgeons
Professor and Robertson-Poth Distinguished Chair in General Surgery in the Department of Surgery
at the University of Texas of Texas Medical Branch in Galveston.

I had the privilege of attending the Japan Surgical Society and the ACS Japan Chapter annual meetings as President-Elect in 2016 and President in 2017. My wife Mary accompanied me; we greatly enjoyed our visit renewing friendships and making new friends.

In 2017 I also attended the JAWS breakfast meeting. Dr. Kazumi, a member of the ACS Women in Surgery Committee, was my host at this meeting. I had a most enjoyable time and was glad so see so many women surgeons, residents and medical students. It was particularly refreshing to see all the children who came with their mothers.

Mary and I took a boat across the harbor to visit the Yamashita park with its lovely flowers, wonderful sculptures and fabulous view of the waterfront. On another day we visited Kamakura, enjoyed matcha and the serenity of the "Bamboo Temple", and loved seeing the Great Buddha.

After the conference, Professor Kasuhiko Yoshida, ACS Chapter Secretary, graciously took us to Tokyo and served as our guide. We had an outstanding lunch at Asakura, a tour of the Sensoji Temple and the Tokyo Tower. That night, Professor Yanaga, governor, and his wife, hosted a dinner at Tokyo Shiba Tofuya Ukai for Mary and me, Professor Yoshida and Dr. Kazumi. The meal was most enjoyable and was the company.

The Japan chapter is one of the largest international chapters and we are proud of the enthusiastic participation of the Fellows in the activities of the College. I would like to congratulate the 31 new Fellows who were initiated into the College in 2017.

略　歴

Dr. Courtney M. Townsend, Jr., former President of the American College of Surgeons 2016-2017. He has received awards and honors which include Research Career Development Award, NIH, 1982; Ashbel Smith Distinguished Alumnus, 1986, UTMB; James IV Surgical Traveller for 1986; President, American Pancreatic Association, 1992-1993; ACGME Residency Review Committee for Surgery, 1994-1999; James IV Association of Surgeons, Inc., Board of Directors, 1999-2002; Texas Cancer Council Member, 1992-2010; Director, American Board of Surgery, 2000-2006; Chairman, American Board of Surgery, 2006-2007; American College of Surgeons Board of Governors Executive Committee, 1999-2003; Chairman, American College of Surgeons Board of Governors, 2004-2005; Secretary, American College of Surgeons, 2006-2013; Secretary, Southern Surgical Association, 1998-2003; President, Southern Surgical Association, 2004; President, American Surgical Association, 2007-2008; Chair, American Surgical Association Foundation, 2013-2014.

Dr. Townsend was John Woods Harris Distinguished Chairman, June 1995-October 2014, and is currently Professor and Robertson-Poth Distinguished Chair in General Surgery in the Department of Surgery at the University of Texas Medical Branch in Galveston.

Dr. Townsend is Editor-in-Chief of the Sabiston Textbook of Surgery: The Biological Basis of Modern Surgical Practice, for the 16th, 17th, 18th, 19th and 20th editions. He is on the Editorial Advisory Board for The American Journal of Surgery and Deputy Editor for the Journal of the American College of Surgeons.

American College of Surgeons（ACS）の日本支部長退任のご挨拶

東京慈恵会医科大学外科学講座消化器分野

矢永　勝彦

Katsuhiko Yanaga, MD, PhD, FACS

2011年11月から2期にわたりAmerican College of Surgeons（ACS）の日本支部長を務めさせていただき、2018年4月に任期満了にて退任させていただきます。大変貴重かつ名誉な機会をいただき、皆様のご高配に心より感謝いたします。

米国で卒後2年目から3年間を一般外科レジデントとして、また卒後8年目から3年間をフェロー／スタッフとして勤務した経験から、米国の外科やACSへの親近感があり、またかつて勤務した九州大学の杉町圭蔵先生らのご推薦で1996年にSan FranciscoでFACSを授与され、以来、ACS Clinical Congressには時々演題を出しておりましたが、前任の谷川允彦先生から支部長を引き継ぎ、この6年あまり、多くの貴重な経験をさせていただきました。

幸い、前任の谷川允彦先生と当時Secretaryの高折恭彦先生がBylawなど日本支部の体制を整備していただき、お陰様で毎年の日本人のFACS授与者数は以下の通り、北米外では常に上位で推移しました。

2013年　28人（第3位）
2014年　32人（第2位）
2015年　24人（第4位）
2016年　32人（第3位）
2017年　32人

またこの間にHonorary fellowとして2012年に東北大学の松野正紀先生、2016年に九州大学の水田祥代先生が顕彰されました。

このように多数のInitiatesとご高名なHonorary fellowをご推挙いただいた指導的立場の会員の先生方に感謝すると共に、この時期に支部長を仰せつかったことを大変幸運であったと感じております。

恒例の4月の日本外科学会学術集会期間中に開催する日本支部例会には、以下のACS President/Vice Presidentを外科学会会頭らと協力して招致し、ACS Presidential Lectureを実現すると共に、日本支部で格調高い講演を拝聴することができました。

2012年 Patricia Numann先生（President）
2013年 Brent Eastman先生（President）
2014年 Carlos A. Pellegrini先生（President）
2015年 Kenneth Mattox先生（Vice President）
2016年 Courtney Townsend先生（Vice President）
2017年 Courtney Townsend先生（President）
2018年 Barbara Bass先生（President）

またSNSが普及した現在、ACS日本支部のFacebookを立ち上げ、若手外科医をターゲットに、活動をvisualに発信しています。

やり残したことと言えば、ACS日本支部のホームページの立ち上げがございます。ACS本部から支援の連絡が来たことを当てにしていたものの掛け声倒れで、それに引っぱられる形で未着手のままです。こちらは次期支部長、Secretaryにお願いできれば幸いです。

以上、お陰様でSecretaryの吉田和彦教授と共に何とか務めを終えることができ、2017年のClinical Congressの際にほっと胸を撫でおろしました。（写真）

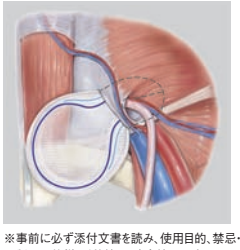
ACSとの関係自体は今後も2期目終盤のGovernor-at-LargeとRegion 16（Asia-Pacific region）のChair、ならびに2期目のInternational Relations CommitteeとそのEducation, Quality & Communication SubcommitteeのChairが続きますが、それらも随時後任の先生方に引き継いで行きたいと考えております。

最後にACS日本支部の今後の益々の発展と、会員の皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

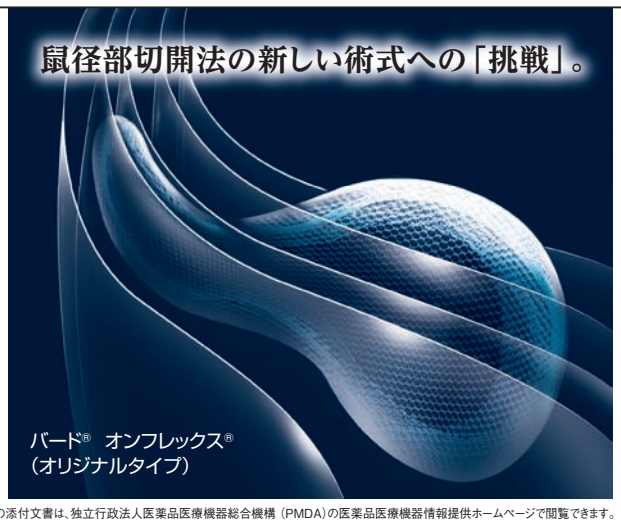
略　歴

1979年 3月 九州大学医学部医学科　卒業
1979年 6月 九州大学医学部附属病院研修医（第二外科）
1980年 7月 米国ハーネマン医科大学・関連病院レジデント（一般外科）
1983年 8月 大分赤十字病院医員（外科）
1986年 4月 九州大学医学部附属病院助手（第二外科）
1986年 7月 米国ピッツバーグ大学医学部附属病院 クリニカル・フェロー（外科）
1988年 1月 米国ピッツバーグ大学医学部客員助教授（外科）
1989年11月 九州大学医学部講師（第二外科）
1998年 4月 松山赤十字病院部長（外科）
2000年 4月 長崎大学医学部講師（第二外科）
2003年 4月 東京慈恵会医科大学外科学講座教授（消化器外科分野）現在に至る

ONSTEP Technique
オンステップ法
Featuring BARD® ONFLEX®
for Open Inguinal Hernia Repair



Step up to a new repair.
オンステップ法はリヒテンシュタイン法の簡便な手技と
腹膜前修復法の強固な修復の両方を兼ね備えた手技です。



BARD
株式会社メディコン

販　売　名：バード オンフレックス
承 認 番 号：22800BZX00298000
クラス分類：[4]高度管理医療機器
一般的名称：吸収性ヘルニア・胸壁・腹壁用補綴材
償 還 区 分：繊維布・ヘルニア・形状付加

※事前に必ず添付文書を読み、使用目的、禁忌・禁止、警告、使用上の注意、貯蔵・保管方法及び使用期間等を守り、使用方法に従って正しくご使用下さい。本製品の添付文書は、独立行政法人医薬品医療機器総合機構（PMDA）の医薬品医療機器情報提供ホームページで閲覧できます。
※製品の仕様・形状等は、改良等の理由により予告なく変更する場合もございますので、あらかじめご了承下さい。
※Bard、バード、ONFLEX、オンフレックスは、C. R. Bard社の登録商標です。

製造販売業者 ： 株式会社メディコン　本社　大阪市中央区平野町2丁目5−8 ☎06（6203）6541（代）

外科学の新知見を求めて

国立国際医療研究センター理事長
東京大学名誉教授

國土　典宏

Norihiro Kokudo, MD, PhD, FACS, FRCS

President, National Center for Global Health and Medicine, Professor Emeritus, The University of Tokyo

このたび、第118回日本外科学会定期学術集会を2018年4月5日～7日に、東京国際フォーラムとJPタワー＆カンファレンスで開催させていただくことになりました。ACSとの交換プログラムを今回も企画し、ACS President であるHouston Methodist HospitalのBarbara Lee Bass教授をお迎えしてOpportunities for partnerships with international surgical organizationsというタイトルの講演をお願いすることになりました。学会初日の4月5日（木）11時から5階ホールB5（第6会場）で行いますのでACS会員の多くの皆様のご参集をお願いいたします。また、引き続いて同じ会場でドイツ外科学会会長であるJörg Fuch教授の講演も予定しています。

今回、学術集会のメインテーマを「外科学の新知見を求めて」In search of new knowledge for surgeryと定め、学術集会本来の目的である新知見（ノイエス）の発表にこだわる企画を考えて参りました。学術集会の主役は新知見を発表する一般演題であり、これは原著論文に相当します。日本外科学会の一般演題に採用されることは、かつて若手外科医にとって大変名誉なことでした。この原点に回帰し、一般演題・オリジナル発表を重視する構成を工夫しました。これに関連して第61回総会（1961年）以来57年ぶりに「宿題報告」を復活させました。各領域から9つのテーマを選定して2016年秋に第一人者の教室代表者の先生方にご準備をお願いしました。所属教室の総力を上げて集積した未発表の重要な研究成果をご発表いただけるものと期待しております。また、一般演題から特に優秀であると評価された13演題をplenaryセッションで取り上げ、それぞれ当該領域の権威の先生方にディスカッサントをご依頼しました。そして、一般演題応募締め切り後に得られた新知見をlate breaking abstractとして2018年1月末まで受け付け、8演題を採択しました。この他、優れた最新原著論文からのアンコール発表（34題）など、新知見（ノイエス）または準ノイエスを発表しやすい企画をいろいろと考えました。上級演題セッションのテーマはサブスペシャリティ学会ともご相談しながら重複をできるだけ避け、「どの学会でも同じ様な発表を聞く」という状況を打破したいと思っております。また、新のノイエスをサブスペシャリティ学会で発表する傾向も一部にあるようですので一石と投じたいと思っています。

特別講演は世界初のAIDS特効薬開発者である満屋裕明NCGM研究所長・米国NIHレトロウィルス感染症部部長・熊本大学特別招聘教授、TGF-β研究第一人者である宮園 浩平東京大学教授・日本学士院会員、肺がん原因遺伝子EML4-ALKを発見した間野博行国立がん研究センター研究所長・東京大学教授、そして、活発な評論活動だけでなく教育にも造詣の深いジャーナリストの櫻井よしこさんにお願いしました。もちろん、映像を駆使したビデオセッション、エキスパートが対立した意見を闘わせるディベートセッション、若手のためのセッションなども予定しております。また、2018年4月から新しい専門医制度が開始されますので、認定・更新に必要な領域別講習や共通講習も会員が参加しやすいスケジュールで予定しました。

もう一つ忘れてはならないのは昨年9月に急逝された渡邉聡明前理事長のことです。私が外科学会理事長時代、渡邉先生には理事として、同僚外科教授としていろいろと相談に乗っていただきお世話になりました。志半ばで病に斃れられた先生のご無念を思うと残念でなりません。この場をお借りして先生のご業績を讃え、ご冥福をお祈りいたします。大会初日午前第2会場の「IBD外科治療の現状と展望」を「渡邉聡明先生メモリアルセッション」と銘打ち、セッション最後に渡邉先生の恩師である武藤徹一郎先生に特別発言をお願いしました。また、会場内に渡邉聡明先生を偲ぶ展示も予定しています。

日本外科学会定期学術集会を東京大学として主催させていただくのは、幕内雅敏会長が主催した第106回以来12年振りとなります。東京大学外科には6つの講座と9つの診療科がありますが、2012年に初めて合同して東京大学外科同窓会を結成しました。外科が一つとなって発展しようという機運の中で本学術集会を主催できますことを大変嬉しく思います。教室の初代教授である佐藤三吉先生が1899年（明治32年）に第1回総会を開催して以来、日本で最も伝統のある本学会を開催させていただけますことは、東京大学外科にとりまして、また現在私が所属しております国立研究開発法人・国立国際医療研究センター（NCGM）にとりまして大変名誉なことであり、両施設のスタッフに協力していただいて皆様をおもてなししたいと思っています。

桜の開花時期が2017年と同じであれば、ちょうど学会会期中に満開になることが期待されます。満開の桜の東京で学会の原点に戻った新知見（ノイエス）があふれる学会にしたいと思っております。皆様ご指導・ご協力よろしくお願い申し上げます。

略　歴

1981年3月	東京大学医学部卒業
1981年6月～	東京大学医学部附属病院第二外科　研修医
1988年1月～	東京大学医学部附属病院第二外科　助手
1989年8月～1991年7月	米国ミシガン大学外科留学
1995年3月～	癌研究会附属病院外科　医員
2001年1月～	癌研究会附属病院消化器外科　医長
2001年4月～	東京大学大学院医学系研究科外科学専攻臓器病態外科学肝胆膵外科　助教授
2007年12月～	同　肝胆膵外科、人工臓器・移植外科教授、臓器移植医療部部長兼任
2015年4月～	東京大学教育研究評議員
2017年4月～	国立研究開発法人　国立国際医療研究センター　理事長（2017年6月　東京大学名誉教授）現在に至る

新American Collage of Surgeons（ACS）のFellowになりまして

東京大学大学院医学系研究科消化管外科

野村　幸世

Sachiyo Nomura, M.D., Ph.D., A.G.A.F., FACS

この度、2017年10月、San Diegoで開催されました第103回Clinical CongressにてFellowに任命されました。ご推薦いただきました先生方、そして、Fellow になりますことをお勧めくださいました先生方に心より感謝申し上げます。

私の教室では、ACSのFellowになられた先輩は近くにはいらっしゃらず、ACSのFellowに関しまして、私はあまり良く存じ上げなかったのですが、女性外科医の会を通じまして、錚々たるメンバーの多くは、ACSのFellowになられていらっしゃるのを知り、私も是非、仲間に入れていただきたくなり、応募したものであります。

今回、ACSのClinnical Congressに出席いたしましたのも、初めてでありましたが、FellowのConvocation Ceremonyの荘厳さに驚きました。また、新しいFellowの方はご家族もたくさんお祝いに駆けつけ、本当に喜びを分かち合っていてFellowになるということが、アメリカの外科医にとってはたいそうおめでたい事であるという事がわかりました。折しも、大学の先輩であります、肝臓外科の幕内雅敏先生がHonorary Fellowshipをお受けになり、また、ACSの新Presidentには女性外科医でありますBass 先生がご就任になり、そのご挨拶も近くで拝聴する事ができ、とても心に残るCeremonyとなりました。Bass先生がご挨拶の途中、涙ぐむシーンがあり、女性外科医ゆえにご苦労されておられるのは日本だけではないのかもしれない、と想像いたしました。

アメリカ人で新しくFellowになられる先生方は私などに比べたら、もっとお若い方が多く、おそらくは日本での専門医取得くらいのレベルの先生方のようにお見受けしました。お祝いの言葉を拝聴していますと、体力的にも苦しい、外科のresident生活をやり抜いたことをお祝いしているようで、アメリカでもresident生活は決して甘いものではなく、でも、それを切り抜けると大きな誇りと栄誉が待っている、それがFellow である、という印象でした。昨今、日本でもワークライフバランスが提唱され、大学でも、研修医は17時になったら業務を終了させて帰さないといけないように指導されています。アメリカでは日本よりもワークライフバランスが保たれ、家族と過ごす時間が多く持てるように言われていますが、アメリカの外科の研修医の生活はどうも違うようです。私たちが研修医だった頃に匹敵する、休みなし、何日も家には帰れず、いつ呼び出されるかわからない生活のようです。

自分が研修医だったころの生活を思い出しますと、それは人間的とは程遠い生活であったと思います。しかし、それがその当時、嫌であったかというとそんなことはなく、1日も早く一人前になろうと必死だったように思います。そのために人一倍働こうと思っていました。今、研修医に戻っても、おそらく同じように考えるのではないかと思います。しかし、今、そういう生活ができるかと言われると、子供を抱え、おそらく体力も年齢とともに落ち、そういう生活はできないでしょう。アメリカの外科医もいつまでも研修医のような生活をしているわけではなく、Fellowになった後、結婚をしたり、子供を持ったり、ということを計画している外科医もたくさんいらっしゃると思います。

上にも書きましたが、昨今、研修医にだけは勤務時間を長くしてはいけない規定があります。私は外科医もワークライフバランスが大切、と主張している立場を取っていますが、研修医の働き方に関しましては、アメリカのやり方のほうがいいのではないかと感じます。若いとき、まだ世話をすべき家族がいないときはせいぜい働き、腕を磨き、勉強をし、睡眠時間を削っても頑張り、早く一人前になる。そして、あるレベルに達したら、家族との生活も大切にし、ワークライフバランスを重んじる。この方が、外科全体のレベルを保つのにいいのではないかと思いました。また、逆に、いつまでも何時間も病院にいるような働き方は当然、家族からは疎遠になっていき、職場では利己的となり、いいことばかりはないでしょう。ある程度、人生のステージを区切って、生活態度を変えるというアメリカのやり方が見習えたらいいように思います。

余計なことをいろいろ書きましたが、新しいFellowといたしまして、素敵な諸先輩方のお仲間に是非、入れてください。よろしくお願いします。

略　歴

1989年6月～1991年1月	東京大学医学部附属病院分院外科、研修医
1991年1月～1991年6月	東京都立八王子小児病院外科、医員
1991年7月～1992年1月	自治医科大学附属病院胸部外科、シニアレジデント
1992年1月～1994年3月	友愛記念病院外科、医員
1994年4月	東京大学大学院医学系研究科外科学専攻入学
1995年4月～1998年3月	国立がんセンター研究所支所、がん治療開発部、リサーチレジデント
1998年3月	東京大学大学院医学系研究科外科学専攻卒業
1998年4月	東京大学医学部附属病院分院外科、助手
（1999年7月～12月）	国立がんセンター中央病院外科非常勤医員兼任
2000年4月	東京大学大学院医学系研究科消化管外科学講座、講座助手
2002年5月～2005年3月	Research Fellow, Department of Surgery, School of Medicine, Vanderbilt University
2005年4月～2006年3月	東京大学大学院医学系研究科消化管外科学講座、講師
2007年4月～	東京大学大学院医学系研究科消化管外科学講座、准教授
2011年9月～	東大病院がん相談支援センター長　兼任

抗悪性腫瘍剤　抗ヒトEGFR[注2] モノクローナル抗体　薬価基準収載
アービタックス®注射液100mg
セツキシマブ（遺伝子組換え）製剤
生物由来製品　劇薬　処方箋医薬品[注1]
注1）注意—医師等の処方箋により使用すること
注2）EGFR：Epidermal Growth Factor Receptor（上皮細胞増殖因子受容体）
ERBITUX® CETUXIMAB

●効能又は効果、用法及び用量、警告、禁忌を含む使用上の注意等については、添付文書をご参照ください。

製造販売元
メルクセローノ株式会社
〒153-8926 東京都目黒区下目黒1-8-1アルコタワー 4F
［資料請求先］メディカル・インフォメーション（TEL）0120-870-088

アービタックスおよびERBITUXはイムクロン エルエルシーの商標です。

Merck Serono Co., Ltd. is a subsidiary of Merck
MERCK

2017年4月作成

藤井功一先生を偲んで

東京慈恵会医科大学
葛飾医療センター外科　吉田　和彦
Kazuhiko Yoshida, MD, FACS,
Department of Surgery, The Jikei University

昨年3月5日、Japan Chapterの初代Governorである藤井功一先生が逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。Japan Chapterの設立にご尽力されたことに感謝の誠を捧げながら、思い出を綴らせていただきます。

私に米国外科学の崇高さを教えていただいた、mentorでもある雨宮　厚先生（大船中央病院理事長）の恩師が藤井先生であった関係もあり、長年にわたって、公私ともにお付き合いさせていただきました。

藤井先生は慶應義塾大学医学部を卒業後、横須賀米軍病院でのインターンを経て、フルブライト奨学生としてSt. LouisにあるWashington大学外科で臨床研修を受けられ、その後、スタッフとして勤務されました。当時のWashington大学（Barnes-Jewish病院）外科はDr. Carl Moyerが主宰されており、Harvard大学（Peter Bent Brigham病院）のDr. Francis D MooreやPennsylvania大学のDr. Jonathan Rhoadsなどの"Giant"とともに、臓器の専門性のみならず、外科的侵襲の病態生理など、いわゆる"外科総論"の研究に多くの足跡を残しました。蛇足ではありますが、私の留学先の恩師であるDr. Murray F BrennanもDr. Mooreの弟子であり、留学中は、米国外科学の奥深さを感じた次第です。

藤井先生は帰国後、国立がんセンター外科に勤務され、米国から持ち帰ったBreaker手術を導入するなど、本邦の外科学へ多くの貢献をされました。その後、横浜のBluff病院、東京Medical and Surgical Clinicで主に臨床に従事され、東海大学医学部外科教授としても、活躍されました。

Japan Chapter設立に際しては、1974年のDr. C Rollins Hanlonの来日から、1987年に107番目のChapterとして設立に至るまで、多大なご尽力をされました。その経緯の詳細に関しましては、ACS日本支部ニュースの2015年4月号にご寄稿いただきましたが、ChapterのBylaws、Chapter設立のときの役員、日本のFellowの資格など、その時のご苦労は並大抵のものではなかったと推定されます。この寄稿文の中で私が最も印象に残ったのは、Dr. ACSと呼ばれていたDr. Hanlonに、「ACSは学会でもなければFellowsの仲よしクラブでもない。Collegeであること、すなわち"臨床"外科医であるFellowの全員が外科臨床を勉強する場であって、従ってMember又は会員ではなく、Fellowであることを知っておいて欲しい」とダメ押しされた、という下りです。

藤井先生は、Collegeの神髄、あるいはFellowの意味を理解していたからこそ、Collegeに深い愛情を注ぎ、わが国でもその精神を受け継ぐJapan Chapter設立にご尽力されたのだと思います。毎年、Clinical Congressには、奥様とご一緒に出席され、旧知の外科医との親交を深められていました。Clinical Congressの前後に、勤務地であったSt. Louis、あるいは息子さんが住まわれているBostonを訪問されたことを、楽しそうに話されていたのが思い出されます。藤井先生は英語がとても堪能で、米国人との会話の内容の深さには、いつも感嘆しておりました。

藤井先生もまた、Dr. Hanlonと同様に、Dr. ACSであり、見事な"臨床"外科医でありました。われわれは次世代の外科医のために、先生より授かったFellowの責任と誇りを、永く伝えて参ります。どうぞ安らかにお休みください。

故藤井功一先生
東海大学医学部外科　前教授
メディカル　アンド　サージカル
クリニック　院長
Koichi Fujii, MD, FACS

略歴

1955年3月	慶応大学医学部卒業
1956年3月	横須賀米海軍病院インターン修了
1956年3月	米国フルブライト奨学生
1956年7月	米国セントルイス　ワシントン大学医学部外科インターン
1957年7月	同上　外科アシスタントレジデント
1960年7月	同上　外科レジデント
1961年7月	同上　外科クリニカル　フェローバーンズ・ジューイシュ　アンドチルドレンズ病院　外科スタッフ
1964年1月	国立がんセンター外科
1971年3月	横浜ブラフ　ホスピタル院長
1978年4月	東京メディカル　アンド　サージカルクリニック院長　及び東海大学医学部外科非常勤講師
1990年4月	東海大学医学部　外科　教授

私たちは人びとの健康を高め
満ち足りた笑顔あふれる
社会づくりに貢献します。

TAIHO 大鵬薬品工業株式会社
TAIHO PHARMACEUTICAL CO., LTD.
https://www.taiho.co.jp

New Fellows 新入会員名簿

Ken Eto	衛藤　謙（東京慈恵会医科大学）
Naotake Funamizu	船水　尚武（川口市立医療センター）
Yasuro Futagawa	二川　康郎（東京慈恵会医科大学）
Yasumitsu Hirano	平能　康充（帝京大学医学部附属溝口病院）
Masato Hoshino	星野　真人（東京慈恵会医科大学）
Kei Hosoda	細田　桂（北里大学医学部）
Yoshiaki Ikuta	生田　義明（済生会熊本病院）
Kazuki Inaba	稲葉　一樹（藤田保健衛生大学病院）
Yoshinori Ishida	石田　善敬（兵庫医科大学）
Tetsuo Ishizaki	石﨑　哲央（東京医科大学病院）
Shuichi Iwahashi	岩橋　衆一（徳島大学大学院医歯薬学研究部）
Yoshio Kadokawa	門川　佳央（天理よろづ相談所病院）
Ryuichi Karashima	辛島　龍一（熊本大学附属病院）
Hideya Kashihara	柏原　秀也（徳島大学大学院医歯薬学研究部）
Akira Kenjo	見城　明（福島県立医科大学附属病院）
Shigeru Marubashi	丸橋　繁（福島県立医科大学附属病院）
Koji Morishita	森下　幸治（東京医科歯科大学）
Jun Nagata	永田　淳（産業医科大学若松病院）
Masaya Nakauchi	中内　雅也（藤田保健衛生大学病院）
Sachiyo Nomura	野村　幸世（東京大学医学部附属病院）
Kenichi Ogata	緒方　健一（済生会熊本病院）
Satoshi Ogiso	小木曾　聡（名古屋大学医学部附属病院）
Nobu Oshima	大嶋　野歩（京都大学大学院医学研究科）
Nobuyuki Ozaki	尾﨑　宣之（人吉医療センター）
Yu Saito	齋藤　裕（徳島大学大学院医歯薬学研究部）
Toshihiko Satake	佐武　利彦（横浜市立大学附属市民総合医療センター）
Susumu Shibasaki	柴崎　晋（藤田保健衛生大学病院）
Tsuyoshi Takahashi	高橋　剛（大阪大学大学院医学系研究科）
Ichiro Takemasa	竹政　伊知朗（札幌医科大学）
Motomu Tanaka	田中　求（上尾中央総合病院）
Yuji Toiyama	問山　裕二（三重大学大学院医学系研究科）
Hiroshi Yagi	八木　洋（慶應義塾大学医学部）

事務局便り

2011年11月に日本支部の事務局を、京都大学の高折恭一先生より、引き継ぎ、約7年が経ちました。本年4月でsecretaryを退任し、事務局の引き継ぎもお願いする予定です。矢永勝彦先生もPresidentとしての任期は終わりますが、Governorは継続されますので、引き続きのご支援をお願いいたします。この7年間、secretaryあるいは事務局としての不手際が多々ありましたことを、この場を借りて、深くお詫びいたします。事務局を担当している間、多くのFellowが誕生し、日本支部にご加入いただいたことは、大きな喜びでありました。一方で、出月康夫先生、秋山洋先生、藤井功一先生など、Collegeを愛し、Fellowとしての心構えを教えていただいた方々が亡くなられたことは、大きな悲しみでした。日本人FellowならびにJapan Chapterが、Collegeの良き伝統を継承しつつ、益々発展することを祈念して、最後の編集後記を終わりたいと思います。ありがとうございました。

Fellowsと共に（2017年ACS Clinical CongressでのJapan Chapter Receptionにて）

ACS日本支部事務局　吉田和彦
〒125-8506 東京都葛飾区青戸6-41-2 東京慈恵会医科大学葛飾医療センター
TEL.03-3603-2111　FAX.03-3838-9945　e-mail:kaz-yoshida@jikei.ac.jp